

読売新聞 1994年12月12日

二人の夭折の画家 有元利夫と篠原道生

“夭折(ようせつ)の画家”などというと、とかくマスコミは、その生きざまや画業を美化して書きたがる。

しかし、たとえその画家が無名であったにしろ、常に“死”と共生して生き永らえているものとして、ひたぶるに美を探究したものの遺作を見たい衝動にかられるのは当然だろう。

篠原道生は、1960年、栃木県足利市に画家の父全一の長男として生まれた。

四年後に東京都青梅市の大東農場に移転、貧しいながらも、同じ年ごろの子どもたちと自然と親しみながら兄弟のように、のびのびと育った。

小学校時代から“父に負けない画家”を志し、都立青梅東高校から東京芸大を受験、落ちたあと多摩美大入学。

87年同大学院を卒業、約四か月イタリアに滞在、帰国後、アルバイトをしながら本格的に制作に没頭。

東京・八王子で二回個展を開いただけで92年12月、三十二歳で自死。

今度の遺作展をみると、三角形のどでかいコンクリート塊に押しつぶされそうな男、一見、山野にたわむれるかの男女、宇宙的な広がりの中でマシンのように太く長い腕をバックに男性を描いた三点の油彩と約四十点の水彩、素描が並んでいる。

しかし、どれもフォーブ調の青、緑を主調とした激しい流れの構図なのに、何故か、描かれた人物は孤独や不安の影を宿している。

何となく違和感をおぼえる。

それは大学時代の、友人たちがそうであったように、自由気ままに、“酒を飲み”“オートバイを駆って走り”“音楽を奏でて歌い”詩作し、写真を好んで撮る”若者。

そんなイメージとはほど遠い。

ただ詩の遺稿にく私は絵を描いてしか／身をたてられません／私は絵を描いてしか／身をよこたえられません>と書き残しているように、鋭い感性で純粹に絵に立ち向かい、格闘し続けてきたことが推察できる。

特に水彩、デッサンに、巧みさと豊かな詩情の中に、今にもこわれそうな女性的な表現、苦悩する自画像などがみられる。

時流に合わせて小手先でごまかしたり、ご都合主義でその場しのぎをする多くの作家たちのように、創造者として相反する道を歩み続けることを許せぬ純粹さが、彼を魂のふるさとに呼び戻したとしか考えられない。